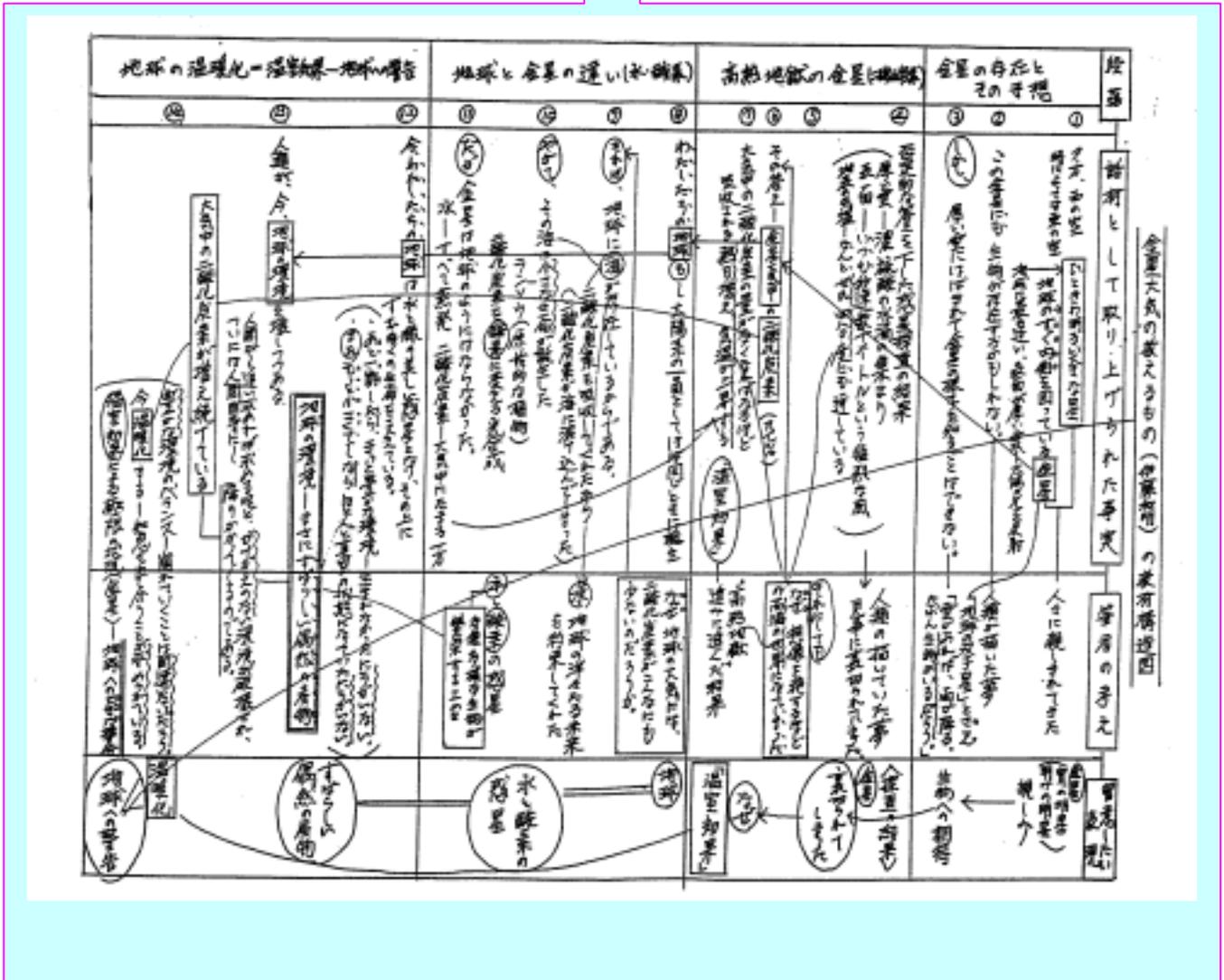


資料 『金星大気の教えるもの』(伊藤和明)での三層の読みについて

< 『金星大気の教えるもの』(伊藤和明) 全体構造図: 教師作成 >



「話柄として取り上げた事実」の部分が「<参考> 情報を読む」であげています第一の層・第二の層の読みにあたります。そして、

第一の層の読み(ことがら読みの段階)

金星が宵の明星、明けの明星として、人々に親しまれてきたこと、
 地球の双子星として、「この金星にも生物が存在するかもしれない」と人々が夢を描いていたが、惑星探査の結果、地表の気温はなんと480度にも達しているという驚くべき事実がわかったこと、それは金星大気中の92パーセントを占める二酸化炭素による温室効果のためであること。
 この金星とほぼ同じ時期に地球も誕生しているが、地球には海が誕生し、ランソウなどの小さな生命が誕生したことによって金星のようにはならなかったこと、
 多種多様な生物が繁殖する水と酸素の惑星になったこと、そして、それはまさにすばらしい偶然的産物だったこと。その地球の環境を人類が壊しつつある、大気中の二酸化炭素が増え続けていて、地球の温暖化がおこっていること、

上記のようなことを読むことが、第一の層を読むこととなります。

また、

第二の層の読み（ことから読みの段階）

金星の話から、高熱地獄の金星について述べ、そして、金星大気と地球大気の違い、地球の温暖化へと話が展開している

これが第二の層を読むこととなります。

そして、教材構造図では、筆者の考え、そしてその下の留意したい表現、これが筆者の想の流れになるのですが、ここを読むことが**第三の層の読み**になると思います。

第三の層の読み（わけから読みの段階）

「金星の大気の話で何が知りたいのか」

「金星大気の教えるものとは何なのか」

「なぜ金星なのか、地球のことが知りたいのになぜ金星の話をもってきているのか」

温室効果による極限の状況が金星であり、金星大気、つまり金星の二酸化炭素は温暖化によって豊かな環境が壊れつつある地球への大きな警告をしているのだ、そのために金星大気の話を取り取ってきたのであり、火星でも、水星でもいけない、地球の双子星とさえいわれる、二酸化炭素のある金星でなくてはならないのだ。

ということを考えることが、筆者の述べ方を問題とする読みになると思います。これを生徒自らが求めて読んでいってくれればいいと思い、今回の授業を構想しました。

通常、説明的文章の指導では、細部（段落・要旨など）から全体（筆者の主張）へいくことが多いのですが、この授業では、「常に大きく全体の構造をとらえることによって、生徒が細部を読みこんでいくことが大事ではないか」と考え、そう心掛けました。

今回の授業では、

個人

班で意見交換

発表

（個人、班代表の場合あり）

という形を多く取り、「個人の読みの時間」をまず保証し、生徒一人一人が自分の意見をもって、班の話し合いや全体発表に臨めるように心がけました。